

北海道の固有高山植物

長野県南安雲郡穂高町 豊 国 秀 夫

北方山草会の機関誌「北方山草」も第3号が出版されることになった。この会が着々と発展して行くことは大変喜ばしいことである。しかし、この原稿を書きつゝ、非常に残念に思うことは、この会の創立者であり育ての親であった阿保精一会长が去る2月に、急に此の世を去られてしまったことである。阿保さんと私との最初の出合いは、昭和34年の初夏、小樽市石山町にある岳父木村誠一の家で鉢植えの山草を前にしてであった。私の専門が植物分類学で、しかもリンドウ科や高山植物が研究対象であったため、それからずっと20年以上お付き合いさせて載いた。昭和39年から私は旭川大学に勤務するようになったため、余りお目に掛る機会が無くなってしまったが、ある時、旭川の郷土博物館で、大雪山の自然についての講演会があった時、態々小樽から出席され、偶然にお会いする機を得たことがあった。また、私が信州に来る前年の昭和52年の秋だったと思うが、当時阿保さんが会長をされていた小樽山草会の見学会が十勝岳でおこなわれ、その際に、私は旭川から参加させていただいた。それが阿保さんと直接お話をした最後になってしまった。本文に入る前に阿保さんの御冥福をお祈りすると共に、北方山草会の益々の発展を祈りたい。

北海道の高山帯に自生する植物は筆者の調査(豊国 1980)では、シダ植物と種子植物合わせて457種を算えることができる。

この457種を分布型から分析して見ると、北海道の固有種は44種で、全体の9.63%、日本の固有種は56種で、12.25%、北海道一樺太分布型が4種、0.88%、北海道一千島分布型が同じく4種、0.88%、北海道一樺太一千島分布型が5種、1.09%、日本一樺太分布型が9種、1.97%、日本一千島分布型が11種、2.41%、日本一樺太一千島分布型が16種、3.50%、アジアの種が96種、21.01%、以上全体がアジア要素で、245種、53.61%である。だから、北海道の高山帯に産する全植物のざっと半分は、アジアの固有種ということになる。アジア-北太平洋要素とアジア-北米要素は、両方合わせて69種、15.09%、ユーラシア要素が20種、4.38%、周極・普遍要素は123種、26.91%となる。結局、北海道の高山植物区系は、種類数全体の50%が、アジアの固有種、残りの50%の半分強、27%が周極・普遍要素から成り立っているということになる。

アジア要素の中で、全世界で、北海道にしか産しない種、すなわち北海道固有種は、前述のように44種あり、それは次の通りである。

1. ヒダカミネヤナギ *Salix hida-ka-montana* HARA (ヤナギ科)
2. ミヤマヤチヤナギ *S. paludicola* KOIDZUMI (ヤナギ科)
3. オオミヤマヤチヤナギ *S. pseudo-paludicola* KIMURA (ヤナギ科)
4. マルバヤナギ *S. yezoalpina*

- KOIDZUMI本種には、変種・品種があり、それらは、イヌマルバヤナギ var. *neoreticulata* KIMURA、オオマルバヤナギ var. *yezoalpjna* f. *grandifolia* KIMURA、およびホソバマルバヤナギ f. *steuophylla* KIMURA である。(ヤナギ科)
5. アポイカンバ *Betula apoien-sis* NAKAI (カバノキ科)
 6. カムイピランジ *Silene hidaka-alpina* OHWI et OHASHI (ナデシコ科)
 7. エゾイワツメクサ *Stellaria pterosperma* OHWI(ナデシコ科)
 8. ヒダカトリカブト *Aconitum apoiese* NAKAI(キンポウゲ科)
 9. ウスバトリカブト *A. corymbiferum* NAKAI (キンポウゲ科)
 10. ユウバリウズ *A. yuparense* TAKEDA(キンポウゲ科)
 11. ヒダカソウ *Callianthemum miyabeianum* TATEWAKI (キンポウゲ科)
 12. ボタンキンバイ *Trollius pulcher* MAKINO (キンポウゲ科)
 13. エゾオオケマン *Corydalis curvicalcarata* MIYABE et KUDO (ケシ科)
 14. リシリヒナゲシ *Papaver fauriei* FEDDE (ケシ科)
 15. シリベシナズナ *Draba igarashii* S. WATANABE (アブラナ科)
 16. タカネグンバイ *Thlaspi japonicum* BOISS. 定山溪天狗岳には、1品種テンググンバイ f. *sagittatum* TOYOKUNI を産する。(アブラナ科)
 17. ヒダカミセバヤ *Sedum cauticolium* PRAEG (ベンケイソウ科)
 18. エゾノクモマグサ *Saxifraganishidae* MIYABE et KUDO (ユキノシタ科)
 19. ユウパリクモマグサ *S. yuparen-sis* NOSAKA (ユキノシタ科)
 20. カリバオオギ *Astragalus yamamotoi* MIYABE et TATEWAKI (マメ科)
 21. レブンソウ *Oxytropis megal-anthe* BOISS (マメ科)
 22. ミヤマハンモドキ *Rhamnus ishidae* MIYABE et KUDO (クロウメモドキ科)
 23. サマニオトギリ *Hypericum samaniense* MIYABE et Y. KIMURA (オトギリソウ科)
 24. シラトリオトギリ *H. tatewaki* S. WATANABE
これには変種クロテンシラトリオトギリ var. *nigro-punctatum* S. WATANABEもある。(オトギリソウ科)
 25. マシケオトギリ *H. yamamotoi* MIYABE et Y. KIMURA
基本型は高山帯には達せず、高山型はキタミオトギリ var. *kitamense* Y. KIMURA、キタミクロオトギリ f. *nigrum* Y. KIMURAおよびミ

- ネオトギリ *var. montanum* Y.
KIMURA がある。(オトギリソウ科)
26. タイセツヒナオトギリ *H. yoji-roanum* TAKEWAKI et KO. ITO (オトギリソウ科)
27. ジンヨウキスマレ *Viola alliifolia* NAKAI (スマレ科)
28. シレトコスミレ *V. kitamiana* NAKAI (スマレ科)
29. シソバキスマレ *V. yubariana* NAKAI (スマレ科)
30. ホソバトウキ *Angelica stenoloba* KITAGAWA
これには、品種トカチトウキ *f. lanceolata* HARA もある。(セリ科)
31. ヒダカイワザクラ *Primula hidakana* MIYABE et KUDO (サクラソウ科)
32. ソラチコザクラ *P. sorachiana* MIYABE et TATEWAKI (サクラソウ科)
33. テシオコザクラ *P. takedana* TATEWAKI (サクラソウ科)
34. ユウパニコザクラ *P. yuparensis* TAKEDA
ソラチコザクラとユウパニコザクラは *P. farinosa* L. に近く、さらに検討すべきであろう。(サクラソウ科)
35. ミヤマノギク *Erigeron miyabeanus* TATEWAKI et KITAMURA (キク科)
36. エゾコウゾリナ *Hypochaeris crepidioides* MIYABE et KUDO (キク科)
37. ユキバヒゴタイ *Saussurea chionophylla* TAKEDA
花床に全く剛毛が無いので、ユキバトウヒレンやユキバタカネキタアザミから容易に区別できる。ユウパリ岳とトツタベツ岳に産するが、五十嵐恒夫博士がトツタベツ岳で採集されるまで、どうしてトツタベツ産が報告されなかったか不思議である。(キク科)
38. ウスユキトウヒレン *S. yanagisawae* TAKEDA
カムチャッカ産の *S. oxyodonta* HULTEN に近縁である。(キク科)
39. フタナミソウ *Scorzonera rebunensis* TATEWAKI et KITAMURA (キク科)
40. ユウパリタンポポ *Taraxacum yuparense* H. KOIDZUMI (キク科)
41. エゾタカネニガナ *Youngia gymnopus* HARA (キク科)
42. タカネエゾムギ *Elymus yubaridakensis* OHWI (イネ科)
43. エゾコウボウ *Hierochloe pluriflora* KOIDZUMI (イネ科)
44. アポイタヌキラン *Carex apoiensis* AKIYAMA (カヤツリグサ科)
- これら固有種の発見・命名の歴史、記載文などは次の機会にゆずることにするが、

外国の種類との比較検討が、より広範囲になされるにつれて、今迄独立種とされていたものが、外国の種の変種や亜種であることが判明したり、逆に外国の種と同一と考えられていたものが、形質の違いが明白に

なり、北海道産は固有の新種であることが判った場合もある。

なお、北海道の高山植物全般に関しては、本誌2号に発表された野坂志朗博士の記事を参考にしていただきたい。

夕張山脈の植物

札幌市 野坂志朗

はじめに

東径142度15分を軸に、南北約50Kmに及び、夕張岳(1668m)や芦別岳(1727m)などの秀峰を含む夕張山脈所産の植物が、愛好家の注目を集めはじめたのは、いつの頃からであるかは定かではない。この山脈の、特に高山帯の植物がはじめて公的標本庫に収められたのは、地質学者石川貞治氏が夕張岳で採集されたハイマツ、ムカゴトラノオ、チシマフウロ、シナノキンバイ、チングルマ、エゾリソウなどの標本であって、1896年のことであった。その後、北大農学部の先輩諸氏や小泉源一・秀雄両氏をはじめ多くの方々の努力により資料が集積されて今日に至っている。

当山脈所産の植物に関する新知見が初めて公表されたのは、高山植物の権威として高名な武田久吉博士の論文であった。まず1913年、エジンバラの王立植物園紀要27号の“Notes on the Japanese Primulas”の最終章におけるユウパニコザ

クラの記載発表と、これに続く1915年の同紀要39号における“Some New Plants from Japanese Mountains”でのエゾホソバトリカブト、ユウバリリンドウ、ユキバヒゴタイ、ウスユキトウヒレン、クモマユキノシタ及びユウバリカニツリの記載発表である。これらの発表によって夕張山脈が学界の注目を集めることとなった。

続いて、1818—1819年に、当時北大農学部助手であった西田彰三氏による“夕張山脈植物分布論”(札幌博物学会報第7巻)が公表されて、夕張山脈の植生及び所産植物の全貌がベールを脱ぐこととなった。

夕張山脈は、中央高地(大雪山)、アポイ岳、利尻・礼文・増毛山塊とともに、北海道はもとより、わが国における植物学上貴重な地域としての名声を得ているが、筆者は、昭和29年(1954年)以来、特に夕張岳を中心に、この山脈の植物について調査を続けているので、その植生の概況や注目すべき植物について記すこととしたい。